

國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

李良枝「由熙」論：

「」(われわれ) という「」(cage)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-10-22 キーワード: 由熙, 李良枝, 在日コリアン, <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> (ウリ), ことばの杖 作成者: 齋藤, 樹里, Saito, Juri メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000947

李良枝「由熙」論

— 「우리」(われわれ) と「우리」(우리) (cage) —

齋藤樹里

一、はじめに—二つの国、二つの文化、二つの言語
を越えて

第一〇〇回芥川賞「昭和63(1988)年下半年期」の受賞作となった李良枝「由熙」(「群像」昭和63年11月)は、『由熙』(講談社、平成元(1989)年2月)に所収された短篇小説である。韓国でも삼신작(三神閣)より「제100회 아쿠다가와(芥川)賞 수상작!! 재일동포작가 李良枝」(第100回芥川賞受賞作!! 在日同胞作家李良枝)と銘打たれた韓国語版『由熙』(平成元

年2月)が刊行されるなど、国内外を問わずに注目され、好評を博した。

韓国語版『由熙』で強調されているように、李良枝は「在日同胞」、より詳細に述べれば在日コリアン⁽¹⁾一世の父母の元⁽²⁾に日本で生まれた在日二世に該当する。全集収載の自作年譜によると、李良枝の父・李斗浩は昭和15(1940)年に濟州島から日本へと渡つて来たという。昭和39(1964)年、李良枝が九歳の時に両親が帰化し、それに伴い未成年であった彼女も自動的に日本国籍を取得することとなった。このような作家の出自を含めて「由熙」が享受されてきたことは、改めて確認して

おくべきだろう。

「由熙」はソウルを舞台とした物語である。韓国の「最高水準の大学」である「S大学」の国文科に留学していた「在日同胞」である李由熙は、「우리나라(母国)」である筈の韓国での生活に適応できずに文化的失語症のような状態に陥り、卒業を間近にして学業を諦め日本へと帰国してしまう。由熙がソウルを離れる日を起点に、彼女が八回の下宿替えの末によりやく定着した下宿先で過ごした六カ月の生活が、主人である「アジュモニ(おばさん)」の姪であり、由熙と同居していた「オンニ(おねえさん)」の視点から一人称回想形式で語られる。この「オンニ」は「私」は、国籍・出身地・居住地の全てが韓国であり、母語・母国語ともに韓国語である。つまり、国籍的側面、民族的側面、文化的側面、言語的側面の四者が「韓国」に一致する。マジヨリテイとしての韓国人の立場であるといえる。また、「オンニ」は日本語を解さないことが物語中で明らかにされるが、「オンニ」は「私」による語りは基本的には日本語で記述される。基本的にと述べたように、この物語には各所にハンダール表記や韓国語の片仮名表記が織り込まれており、それによってある種の特徴的な文体を形成している。

時系列や境遇は必ずしも一致しないものの、「由熙」には李

良枝の在外国民教育院(ソウル大学予備課程)での一年間の課程を含むソウル大学国語国文科での留学生生活が反映されていることは疑いようがない。実際に彼女自身も「由熙」の中に登場する、オンニも叔母さんもそして由熙も、すべては私の分身です。私はようやく日本人の気持ちや立場を多少なりとも理解できるようになったのであり、また理解していく道こそが、在日同胞である自分自身の姿を客観化して浮き彫りにできる道であることを悟った³⁾と自作を自解している。

「由熙」を論じる際に重要なキーワードとなるのは「二つの」という語が冠された言葉だろう。由熙が「在日同胞」という狭間は生きるマージナルな存在であるが故に、韓国と日本、あるいは韓国語と日本語という二つの国、二つの文化、二つの言語間の矛盾や葛藤、軋轢に目を向けることは、当然の連続きとされてきた。「由熙」は、二つの文化と言語の間に挟まれて、そのいずれにも「故郷」と呼ぶるものをみだしえない、いわば故郷喪失ないしはディアスポラ状況に置かれた人物の疎外感と孤独感を浮き彫りにするのである⁴⁾という小林富久子論の評価は、この物語に対する最大公約的な理解であるとみてよい。また、本文中においても、韓国と日本、韓国人と日本人、韓国語と日本語といった対立軸が提示される。とくにその言語に関

しては、「由熙が書く日本語と韓国語の二種類の文字」「由熙の二種類の文字」というように、文字が二つの種類であることが繰り返され、それが「オンニ」「私」の「ことばの杖」の喪失に深くかわかるという点で、重要な役割を果たしている。

しかし、詳細な検討は次節以降に譲るが、この物語に描かれているのは果たして二つの国、二つの文化、二つの言語なのだろうかという疑問が生じる。それは、言い換えれば、母国（＝韓国）と日本、あるいは母国語（＝韓国語）と母語（＝日本語）という対立軸以外の方法でこの物語を読み替えることができるのではないかという提言である。そしてこの試みの意図することとは、二つの世界で引き裂かれる物語として「由熙」を読むことを敢えて留保することであり、そうでありながらも、日韓の歴史の軽視や過去の漂白に陥らないように慎重を期する態度を表明することでもある。

むろんそこには、李良枝という一人の人間の実生活上の切実な苦悩や葛藤を矮小化し、また同様の苦しみを抱える人びとを蔑ろにする意図は皆無である。そうした問題を見えないもの化する姿勢に真つ向から抗議しつつも、本稿では、李良枝という作家の年譜的事実を介在させなくとも充分に豊かに読み得る「由熙」というテキストそれ自体に、そしてこのテキストが胚

胎する問題自体に目を向けたのである。先廻りをして結論を述べれば、「由熙」から立ち上がるのは、韓国と日本という二つの国やそれに付随する文化、韓国語（母国語）と日本語（母語）という二つの言語、このような二つの世界の間での揺れや葛藤に留まらない。むしろ、このような二項対立を内部から突き崩す動きを一貫して見出すことさえできるのだ。そして、主人公由熙の苦悩の正体も、同様に決してそこだけには収まらないといえるのである。

繰り返しになるが、それは「在日同胞」という、否応なしに歴史の重みを背負わされた由熙の存在や、日韓の近現代史から目を背けることを決して意味しない。由熙の苦悩をステレオタイプやカテゴリーで判断することから一度距離を置き、テキストそれ自体の問題としてこの物語を考えたいのである。山崎和論⁵⁾は、この物語が「在日朝鮮人文学」として読むことを期待させつつ、当事者の由熙にその内面を語らせず、韓国人の「私」に不在の当事者について語らせることで、構造的に「在日朝鮮人文学」としての読みを拒絶する」と、首肯すべき重要な指摘を物語構造に即して行っている。この論の言葉を借りれば、本稿は物語内容の側から「在日朝鮮人文学」としての読みを拒絶する試みであるともいえるだろう。

二、韓国(語) / 日本(語) という見せかけの対立

「由熙」に描かれているのは、韓国と日本、あるいは韓国語と日本語、母国語と母語における対立や分裂に纏わる問題なのだろうか。たとえば、寺下浩徳論^⑤は「この小説が「母語」と「母国語」、「祖国」と「母国」といったあいだの分裂を描き、それらの関係性を鋭く問い返したものであることは、いままで多くの論者が指摘してきた」と端的に研究状況を整理した上で、「こうした捉え方が注目する論点」を「括弧で括られた漢字表記の「由熙」(ゆき)と、括弧で括られた韓国語表記の「유희」^⑥とのあいだにある相剋であり、葛藤だといえる」と簡潔にまとめられている。一方で、上田敦子論^⑦は、「由熙」は、在日韓国人女性^⑧が韓国に行き、母国(語)であるはずの韓国(語)と、母国(語)でも外国(語)でもある日本(語)との間で苦しみ、耐え切れず日本(語)へ帰るまでの過程を描いた作品ということになっている」と先行研究における概要を取り出し、「これらの概要に共通しているのは、日本(語)と韓国(語)という二項対立であり、この枠組は一見有効であるようだが、前述した「日本語」と「韓国語」の不安定な配置のまえにすぐに限界に至り、

解体され、概要も同時に無効になっていってしまうのである」と、このような二項対立の限界を言語の側面から指摘している。また、作者である李良枝は「由熙が乗り越えなければならなかった壁の実体」として「生きることへの勇氣」という言葉で集約できるもの」を挙げ、「母国語と母語の葛藤。日本と韓国という二つ国の間の葛藤など。結局はすべてが、究極的には現実をあるがままの姿で受け入れ、許容する勇氣と力みたいな、人間の存在における根本問題と結びつくものであったに違いありません^⑨」と述べている。この作者の言葉は、一つの解釈として十分に納得できるものである。しかし、書き手の意図を超えて生成される意味や解釈もまた、同時に許容されるべきであることは言うまでもない。

本稿は、「由熙」にこのような二項対立が存在すること自体を否定するものではない。しかし、二項対立の存在を指摘することに、今さら生産的な意味があるとは思われない。それよりもむしろ、この二項対立が人為的に、歴史的に、そして多分に政治的に構築されたものであることを指摘する方が有効であろう。誤解を恐れぬ言い方をすれば、韓国 / 日本という対立は、複数の可能性の中から任意に取り出されたものに過ぎないのである。複数の可能性とは具体的には何を指すのか。それは、た

たとえば韓国／北朝鮮／旧朝鮮半島／（分断が解消された状態としての）南北統一朝鮮／日本などが挙げられる。というのも、これらの国境線は、さまざまな国や政府の権力闘争によって偶発的に引かれたに過ぎないからである。日本を中心に朝鮮・アメリカを含むさまざまな国や政府の思惑によって曖昧化された「清算」すべき日本の植民地支配責任。冷戦体制における東西の対立と「日帝残滓」をめぐる対立が絡み合った朝鮮戦争による半島の南北への分裂。韓国併合によって強制的に「日本国籍」へと組み込まれた「朝鮮人」の外国人登録令に伴う「外国人」化や、サンフランシスコ講和条約締結による国籍選択権を持たぬままの「日本国籍」喪失^⑤。このような無責任な戦後処理や複雑な国際状況によってこれらの国境線が引かれたのであり、植民地時代にルーツを持つ在日コリアンとは、第一にこうした国際間でのパワーポリティクスに否応なしに巻き込まれた被害者なのである。在日コリアンの意識や生活の実態とは断絶した形で引かれた政治的で人為的な国境線が要請した韓国（人）／北朝鮮（人）／朝鮮（人）／日本（人）といった対立項は、国籍、出身地、居住地、政治的立場、思想、アイデンティティ、生活状況・情況、個人や集団の選択を示す意味では重要だが、本来はさまざまなグラデーションの中で成立している筈のそれら

を、元から独立する存在であるかのように切り分けることは、この物語を解釈する上で有効ではない。端的に言えば、「由熙」の物語には、「二つの」ではなく、「複数の」国をも背後に想定し得るということであり、これらを対立するものとして殊更に切り分ける必要はないのではないかということである。

重要なのは、本文中で由熙の国籍が明示されていないながらも、「オンニ」＝「私」が由熙を「在日同胞」であり「韓国人」、「韓国人」として、韓国人になろうとてあがいている」と認識しており、同時に由熙が「在日同胞」であり「韓国人」という概念を内面化している（ように見える）点である。そこから窺えるのは、「在日同胞」という言葉から韓国と日本という二つの国のみを取り出して対立させる、国籍的側面、民族的側面、文化的側面、言語的側面の四者が一致する韓国人マジヨリテイとしての「オンニ」や「アジュモニ」をはじめとする周囲の人びとの意識や無意識であり、そうした意識や無意識に少なくとも表面上は抵抗することなく、マジヨリテイの期待に半ば呼応する形で「在日同胞」であり「韓国人」であることを選択した（あるいは選択せざるを得なかった）由熙の韓国における在り方や生存戦略である。しかしそれは、由熙が韓国において（そして当然日本においても）自身の属する国がどこであるかとい

う問題を常に突き付けられ、表明せざるを得ない立場であるからに他ならない。その顕著な例として、「——由熙、あなたはけちゃんばよ。在日同胞っていうのは、日本人なんだわ。ううん、日本人以上に韓国をばかにして、韓国を蔑んでいるのね。」という「オンニ」の言葉が挙げられる。個人への批判が一足飛びに「在日同胞」という属性への批判へと拡大し、自身のエスニシティをマジョリテイによって勝手に同定されてしまう。それは、いつでも自身が排除や差別の対象になり得るというあまりにも理不尽な立場を再認識させるものであり、こうした危機と常に隣り合わせに生きざるを得ない由熙に選択の余地は殆どないといつてよい。そして、非対称や差別の是正のための措置をまるで特権であるかのように受け取るマジョリテイたちの無理解を前に、由熙が萎縮し韜晦する以外の態度を取ることができるとかという問題も、この範疇で考えられる。

——じゃあ、S 大学にはどういう風にして入ったの？

私は訊いた。

この質問も、由熙はすでに何回となく訊かれていた様子だった。由熙の発音の不正確さや表現のたどたどしさを聞き取り、訝しくさえ思っている私の表情や口調も、由熙は

すでに読み取っていたようにも思えた。

——特別な試験を受けて、受かったのです。

由熙は言った。

訊かれることに慣れてはいても、その目や声の調子に力がなくなり、言い訳するような後ろめたさのようなものが伝わってきた。由熙は続けた。

——韓国の、母国の大学に留学するために、母国修学生という名目で一年間通う予備校のような学校があります。

そこには在日同胞だけでなく、海外の、いろいろな国から来た僑胞学生も集まってきました。そこで、国語と英語と歴史を習うんです。そして、そういう海外に育った留学生のためだけの、本国の学生たちには想像できないくらいに簡単な試験を受けて大学に入ります。ある大学の場合などは、面接だけして無試験で入れるようなところもあります。

「…」

叔母も私も、初めて聞く話に驚いていた。受験戦争にあけくれ、親も子供も必死になっている韓国の学生たちの事情を思うと、いくら海外同胞とはいえ、あまりにも特別に扱われ、優遇されているような気がしてならなかった。海外同胞は母国を知らずに育つ。それには同情できても、だ

からと言つてどの大学にも特別に入れると言うのは、やはり複雑な思いにさせられた。

目を向けなければならぬのは、本来であれば極めて個人的な問題として開示する必要がない筈の入学経緯の説明を余儀なくされる由熙の状況である。「海外に育つた留学生」のみが受験できる「特別な試験を受けて、受かった」のだと説明するためには、自身が「特別な試験」の受験資格を持つ「在日同胞」「僑胞学生」に該当することを明かさなければならない。そこにあるのは、「在日同胞」という自身の出自の開示を伴う形で、（しかも何度にも亘つて）入学の経緯の説明をマジョリテイ側から期待されるという圧倒的な理不尽さである。

母国語と母語という対立も、同様に見せかけの対立である。母国語という語が国籍や政治的立場から無縁でいられない概念であることを踏まえれば、この点は改めて論じるまでもないだろう。また、韓国語と日本語の対立が意味を持たないことは、既に上田論⁽¹²⁾に詳細な指摘がある。上田論は、「由熙が分かち書きを必要としないのは、漢字仮名交じり文を読むまなざしでハングルを見ているからである。つまり由熙はハングルという表音文字を読む過程において、音の中に表れる、漢字で表象され

得ることばの単位を追っているということである」と指摘した上で、「しかしオンニは「日本語」という対立項を持ち出し比較することによって、テイオスギを「韓国語」に置き換えてしまふ。その結果、読むというまなざしに内在する変換過程は隠蔽され、「日本語」と「韓国語」との対立があたかも彼女たちの発話を支配しているように見えるのである」と二項対立が仮構されていくメカニズムを明らかにする。言語の場合もやはり、着目すべきは二つの項目の対立関係そのものではなく、二つを取り出してそこに対立関係を持たせようとする志向にこそあるといえるだろう。

三、正しい韓国語という幻想

言語の問題で今一つ考えたいものは、由熙が苦悩し、「オンニ」が由熙に修得することを強いた韓国語、より正確にいえば、二人が思い描くあり得べき状態の韓国語とは何かという問題である。この理想状態の韓国語の姿を、本稿では仮に「正しい韓国語」と名付けておくことにしよう。中山亜紀子論⁽¹³⁾が「一言で「韓国語（日本語）」と言つてもさまざまな使い方や使い手がある。一枚岩でなく、ある種まとまりをもった雑多なものを「韓国語

(日本語)と呼んでいるに過ぎない」と指摘するように、韓国語とはさまざまなグラデーションの中で成立する言語の総体的な姿であり、そこに正確さや不正確さを見出すのは、何らかの規範意識に裏打ちされた結果だといえる。

その韓国語にしても、言語学を専攻しているというにしては、由熙の発音はあまりにも不確かで、文法でも初歩的な間違いが目立ち、気になってしかたがなかった。ヨ、^{トッブ}、^{トッブ}、^{トッブ}、^{トッブ}、^{トッブ}、などの類いの破裂音が全く出来てはいない上に、^{トッブ}、^{トッブ}、^{トッブ}、などの音もはっきりと出せず、^{トッブ}、^{トッブ}、^{トッブ}、と区別されなまま発音されていた。由熙の韓国語を聞いたなら、何を喋っているのかよく聞き取れない韓国人もいるに違いなかった。

引用は、「オンニ」による由熙との初対面の回想の一部である。「空の星を掴まえるくらいに難しいと言われている」「最高水準の大学」である「S大学」の国文科に所属し、「言語学を専攻している」という前提条件から、由熙の話す韓国語の実力が判断されている。ちなみに、この「オンニ」の発音に対する認識の一部は明らかな誤謬を含む。言語学専攻であるからといっ

て、必ずしも音声学に長けているとはいえず、そもそも仮に音声学を専門分野としているからといって、その学問的理解と発音の巧緻とはまた別事である。また、「文法」の「初歩的な間違い」にしても、第一言語話者の考える韓国語の「初歩的な間違い」と、第二言語として韓国語を習得した者が実際に直面する「初歩的な間違い」とは必ずしも一致しない。しかし注目したいのは、そうした誤謬の有無よりも、ソウル大学を容易に彷彿させる「S大学」に寄せる「オンニ」の過剰な期待と、由熙の話し言葉としての韓国語に正しさを要請する「オンニ」のまなざしを、この引用が示している点だ。では、書き言葉としての由熙の韓国語については、どのように提示されているだろうか。

宿題のレポートを提出する時も、私が下書きを読んで誤字や表現の間違いを直した。由熙は、話し言葉の実力からは想像できないほど、書く韓国語は巧みだった。いかにも日本語を直訳したような、意味は想像できても一読するとなんかおかさっぱりわからない表現をしていることもあったが、時には、はつとさせられるような言い回しを使っていたりもした。

——由熙、あれだけ言ってきたのに、どうしてティオスギ（分がち書き）ができないの。文節の、ほらここもここも、もつときちんと間を空けないとだめでしよう。ここも、ここもよ。空け過ぎかと思うくらい空けて書きなさい。ティオスギの癖を早くつけるのよ。日本語みたいにしたら書いてばかりいてはだめなのよ。わかっているんでしょ、あなが書いてるのは日本語ではないのよ。

「ティオスギ（分がち書き）」がマジヨリテイとしての韓国人にとつても決して容易ではないことは、七級・九級公務員試験の国語に「ティオスギ」が頻出であることからも明らかである。そもそも「ティオスギ」はハンゲル創製時から存在していたのではなく、イギリス人牧師 John Ross が執筆した朝鮮語教材「Corean Primer」（明治10（1877）年、American Presbyterian Mission Press）の中で使用されたのが起源であると言われている。ハンゲルの縦書きにこだわり「訓民正音フナムを創製した世宗大王はどうかしら。」と眩く由熙にとつては、後代に規範と化した「ティオスギ」が納得できないものであった可能性も否めない。

由熙の「誤字や表現の間違い」は、たとえば次の引用に表れ

ている。

연니
저는 위선자입니다
저는 거짓말쟁이입니다
（オンニ）

私は 偽善者です

私は 嘘つきです

括弧書き部分で「嘘つき」と翻訳されている「거짓말쟁이」という語に着目したい。この語は「거짓말쟁이」の非標準語形態である。「장이」・「쟁이」はともに接尾辞であるが、「표준어 규정」（標準語規定）⁽¹⁶⁾の제1부 제9항（第一部第九項）において、「기술자에게는, 장이, 그 외에는, 쟁이, 가불능 형태를 표준어로 삼는다」（技術者には「장이」、それ以外には「쟁이」が付く形態を標準語とする）と定められている。そのため、「嘘をつく人」という意味で「거짓말쟁이」を使用する由熙の韓国語は標準語の規格から外れるのである。むしろ、これを誤用と指摘することは簡単であるが、この誤用が母語話者にも頻繁に見られるという点を忘れてはならない。しかし、

同じ「**저것말장어**」という誤用であっても、由熙の場合は、それが即ち韓国語の実力の不足や稚拙さに接続されて解釈されるものとなるのだ。むしろ、この引用に続く場面で「オンニ」が嗜めるのは誤用ではなく飲酒行為であり、後にこの由熙の書いた「大きな乱れた文字」を再び想起する際、「オンニ」は「たまたまなく、由熙、と思わず呼びかけそうになる。そこにあらるのは、「オンニ」の由熙に対する確かな愛情であろう。しかし、「誤字や表現の間違い」、その発音の不正確さが繰り返して語られるこの物語の中に由熙の「**저것말장어**」という韓国語を置いたとき、この言葉は由熙の韓国語の未熟さの証明として解釈が可能な要素となってしまうのである。

—— ねえ、叔母さん、叔母さんはどう感じました？ 由熙の韓国語、この家に来てからもちつとも上達しなかった。発音も相変わらずめっちゃめっちゃで、国文科の学生とは思えないくらい文法も間違いだらけだった。もちろん、答案用紙はきちんと書いていたかも知れない。書く方は感心するくらいで、私もそれはよく知っています。でも、本人自体がうまくなろうとしていなかったんじゃないかって、そうとしか考えられなかった。

ここで気が付くことがある。それは、「オンニ」が指摘する由熙の韓国語の未熟さは、話し言葉・発音に焦点が当てられているということである。それは初対面から一貫する由熙の韓国語の印象である。先の引用で「**ㄱ, ㄷ, ㅌ, ㅍ**」などの類いの破裂音が全く出来てはいない上に、「**ㄱ, ㄷ, ㅌ, ㅍ**」などの音もはつきりと出せず、「**ㄱ, ㄷ, ㅌ, ㅍ**」と区別されないまま発音されていた」とあったのは、激音(가세소리)・無声有気音の発音ができず、濃音(두껍소리)・咽頭化した無声無気音と平音(예사소리)・語頭は無声無気音、語中では有声化)の区別がないことを意味する。濃音と平音の区別がないというのは、つまり咽頭化の有無の区別がないということであり、有気音と無気音による音韻対立を持つ日本語に引きずられるというより、由熙の発音それ自体の特徴であるといえる(有気音と無気音の区別のなさがむしろ「日本語訛り」の特徴である)。この解釈が単なる誤読ではないことを、「日本語訛りというより、慶尚道訛りに近い感じがした」という「オンニ」の感想が保証してくれる。

かなりのところまで近づいてきて、学生は私に会釈した。—— 不動産屋さんの紹介で来ました。

学生は言った。ぎこちなく、硬い発音だった。日本語訛

りというより、慶尚道訛りに近い感じがした。

「慶尚道訛り」では、初声の平音を濃音で発音する「語頭の硬音化」(어두 경음화) ⁽¹⁷⁾ がその特徴の一つとして広く知られている。つまり、濃音と平音の区別がない由熙の発音は慶尚道にいれば許容されるということであり、破裂音の発音はともかく、「ㄱ、ㄷ、ㅌ、ㅃ」と「ㄱ、ㄷ、ㅌ」の区別のなさは韓国語そのものへの挫折というよりむしろ서울말(ソウル語・ソウル方言)への挫折だといえるのだ。そうしたとき、日本語を解さない「オンニ」による「日本語訛り」というしかない発音の不確かさと抑揚の記憶」という言葉が、果たして正鵠を射ていたかは疑問である。由熙の韓国語は、「日本語訛り」であつたからではなく、서울말を標準語、つまり正しい韓国語とする規範意識から逸脱するが故に非難されているのである。そもそも標準語とは先の「표준어 규정」(標準語規定) ⁽¹⁸⁾ 제1부 제1항(第一部第一項)において、「표준어는 교양 있는 사람들이 두루 쓰는 현대 서울말로 원칙으로 한다」(標準語は教養ある人びとがあまねく用いる現代ソウル語に定めることを原則とする)と規定されていた。ソウル大学を彷彿させる「S大学」への「オンニ」の過剰な期待と、話し言葉としての由熙の韓国語に正し

さを要請する規範意識は、標準語という概念で一致するものであつたのだ。「最高水準の大学」つまり最も「教養ある人びと」が集まる「ソウル」の名を冠した大学。その国文科に所属する由熙は、서울말という標準語に正しい韓国語を獲得しなければならぬのである。由熙の書く韓国語が「オンニ」に比較的高く評価されていたのは、書き言葉は基本的に標準語에 서울말であるからだろう。

しかし、「オンニ」のこのような規範意識を単なるソウル中心主義に回収するのは、あまりに素朴で無配慮な操作である。この規範意識が在日コリアンの言語を疎外するものにもなり兼ねないということに自覚的にならなければならない。在日コリアン一世の殆どが地方出身者であつたという事実を考え併せると、彼らの言語自体がそもそもある種のマイノリティの言語であつたのであり、仮に由熙がその言語を第一言語として獲得していたとしても、それは標準語から距離の遠いものとして規範を逸脱するものと判断されてしまう。また、所謂「在日語」「ウリボンマル」とも言われる、在日コリアンコミュニティの中で発達した、日本語音韻や日本語文法に影響を受けた韓国・朝鮮語も、標準語からの距離が遠いという理由で正しい言語ではないと判断されてしまうだろう。とするならば、在日コリアンにとつ

て、日本語はもちろん、ここで語られる韓国語も、あるいは物語の背景に想定される北朝鮮の標準語である文化語も、これらはすべてどこまでもマジョリティの言語なのである。標準語という言語政策は、ある意味で地方出身者の漂白行為でもある。そして「オンニ」が無自覚であったこの悪意なき疎外を、「ウリ」という言葉が体现しているのである。

四、「ウリ」(われわれ)と「ウリ」(cage)

ここまで論じてきたように、「由熙」とは一見韓国の物語のように見えるが、実は徹底的にソウルの物語であった。そしてそれは、ソウルを「ウリ」とみなす物語だと換言してもよい。

では、「ウリ」とは一体何を指すのか。片仮名でウリとルビが振られているが、「ウリ」と「ウリ」は同一の音ではない。「ウ」は初学者向けの教科書には、日本語の「う」とほぼ同一の音と書かれることも多いが、「E」と「E」というIPA記号表記上の差異から窺えるように、「ウ」は円唇後舌狭母音であり、非円唇後舌狭母音である日本語の「う」よりも口を窄めて発音する必要がある。「リ」と「リ」の場合も、口蓋化する日本語の「リ」と口蓋化しない韓国語の「リ」では調音点が異なり、音声にも

違いが生じる。このような違いを無視して「ウリ」と発音しても意味の辨別にさして支障はないためどこまで発音を意識するかは話者の裁量に任されるが、発音ですらこのように厳然たる差異があるこの「ウリ」という言葉に込められた情緒を日本語で理解することには大きな困難が伴う。

「由熙」で頻出する「ウリ」(母国)という言葉。この言葉の共同体性は既に先行論に指摘がある²⁰⁾。この「ウリ」(母国)という共同体を、安易に韓国という一つの国だと判断したときに零れ落ちるさまざまな可能性については、既に第二節で論じた通りである。しかし、「叔母」の「思想的にだつて日本から来たんだから、危いことがあるかも知れないわ。日本には北の朝鮮総連があるから。」という言葉が象徴するように、韓国という場においては、「ウリ」(母国)に北朝鮮を含む可能性は排斥される運命にある。北朝鮮に、あるいは北朝鮮を含む国にアイデンティティを帰属させている「在日同胞」は、「思想的」に「危い」人物だと烙印を押されてしまうのである。それが、「在日同胞」である由熙へ深い同情を示した人物として描出される「叔母」の口から語られることに、分断の根深さを感じずにはいられない。

「ウリ」(母国)が韓国へと範囲を局限する概念である限り、由

熙は、「우리나라」という共同体に安住することができない。そもそも「テイオスギ」されない「우리나라」とは本国人が韓国を指し示すときに使われる語であり、「母国」という括弧書きはそのような意識に裏打ちされている。また、それは外国人が自身の国を指し示すときの「우리나라」と峻別される概念であり、「由熙」が苦手であるとされた「テイオスギ」一つで、国家に対する自己認識が自ずと表出されてしまうのである。

언니
친구
저는 위선자입니다
저는 거짓말쟁이입니다

(オンニ

私は 偽善者です

私は 嘘つきです)

「우리나라」という言葉に韓国のみを一致させるとき、それは由熙にとって政治的行為にならざるを得ず、そこには否応なしに選択の重みが伴う。それは自らを「偽善者」や「嘘つき」に囲い込むものである。だからこそ、由熙は「이나라」(この国)、「이나라사람」(この国の人)という言葉を選択せざるを得ないのである。しかし、佐藤秀明論が「韓国語における「この国」(イナラ)、「この国の人」(イナラサラム)という語彙は、日本語の「この国」「この国の人」とは、ニュアンスが異なっている」と指摘する通り、韓国語で「이나라」という語彙を選択するとき、そこには否定的なニュアンスが伴われていることが大半である。何故なら国籍と言語が韓国に一致する人びとにとっては、「우리나라」という言葉こそが無徴であり、自然だからである。由熙が「이나라」という言葉を選択したときに「オンニ」が感じていたであろう서운함(期待していたことに対する満たされなさ)というべき感情は、由熙の苦渋の選択とどこまでも擦れ違うのである。

こうしたとき、この物語の中で、「우리」(われわれ)が「우리」(we)として機能しているという事実が気付かされる。

李良枝は「言葉の杖を求めて」の中で「우리(われわれ)」という言葉の深みと温もりを悟らせてくれたすべての人たちに謝意を述べており、したがってこの「우리」という言葉は肯定的に使用されている。しかし、ここで問題としたいのは、そのような作者の意図というレベルを超えて描出される、この物語においての「우리」の姿である。「由熙」における「우리」は、親密性の表示であり共同体を形成する「われわれ」を指す言葉

であると同時に、「cage・檻」としての「우리」、さらには「울타리」(fence・囲い)の慶尚北道方言としての「우리」でもあるのだ。それは、端的に言えば、「オンニ」が設定した서울말を話す人びとという「cage・檻」の範囲の中に、「われわれ」が囲い込まれているという事態を指す。そして由熙は、そうした囲い込まれた「우리」を前提とする「우리나라」を拒絶し、規範化や標準化されることのない「大笏(テグム 横笛)」の「소리」——韓国語「소리」は日本語で「音」とも「声」とも翻訳可能である——に「우리말」を見出す。

우리나라

(母国)

由熙は書いた。文字は大きく、酔いで手が揺れ、乱れていた。由熙はページをめくり、そこにさらに大きく、우리나라、と両側のページいっぱい書いた。ボールペンを紙にくいこませ、破っていくような勢いで、四つの文字を書きつけた。

——何があったの？ 由熙。

私はいよいよ口を開いた。机に倒れかかったまま、横から自分の書いた文字を見つめていた由熙が泣いていること

に気づいた。由熙はノートの本紙をまとめて数枚めくり、現われた白い空白にまた書き始めた。

사랑할 수 없습니다

(愛することができません)

由熙は涙をすすった。嗚咽を上げ、ボールペンを持ったまま口許に垂れた涎を拭いた。濡れてしまったのも構わずに、由熙はまた紙をめくり、右手をのせた。紙に涎が付き、涙を拭った指先が触れた紙も濡れた。

대금 좋아요

대금소리는 우리말입니다

(テグム 好きです)

테그ムの音は 母語です)

申銀珠論(2)が「由熙の「우리」からの離脱を挫折と決めつけ、それを批判する権利は誰にもない」と指摘するように、囲い込まれた「우리」から逸脱する由熙を、従来の解釈のように韓国生活の挫折という範疇で捉えることに生産的な意味はないだろう。この逸脱は、この物語の末尾にて象徴的に登場する「ことばの杖」と、密接にかかわるものである。

——ことばの杖。

……………。

——ことばの杖を、目醒めた瞬間に掴めるかどうか、試されていような気がする。

……………。

——**아**なのか、それとも、あ、なのか。**아**であれば、**아**、**야**、**어**、**여**と続いていく杖を掴むの。でも、あ、であれば、あ、い、う、え、お、と続いていく杖。けれども、**아**、なのか、あ、なのか、すっかりとわかった日がない。ずっとそう。ますますわからなくなっていく。杖が、掴めない。

由熙は、ことばの杖、とも言い、ことばからなる杖、とも言い替えた。

由熙が「**우리나라**」(母国)「**우리말**」(母語)という「母」と接続される「**우리**」から逸脱することを強調するかのよう、奇しくも「ことばの杖」は「**가**、**나**、**다**、**라**、」や「あ、か、さ、た、な、」ではなく、「母音」(모음)を手掛かりに掴むものとされ、その「わからな」さ、「掴めない」さが吐露される。本稿が目を向けたのは、この「掴めない」「杖」の豊かさである。

どちらか一方に偏ることがない複層的な言語の可能性を、そこに見出したいのである。狭隘な「**우리**」(われわれ)という「**우리**」(age・檻)からの逸脱、「**우리말**」(母語)という「**우리**」(안·에·거·두·어·진)「**말**」(age・檻)に閉じ込められた(言葉)からの逸脱であり、標準化も規範化もされないことのない、自らの言葉の模索の姿である。「**아**」でもなく「**아**」でもないこの由熙の言葉、「掴めない」「杖」の言葉こそ、代理でもマジョリテイのそれでもない、また韓国語と日本語という二項対立を無効化する複層的な言葉なのである。

五. おわりに——開かれた〈**우리**〉の可能性

「**우리**」の範囲を局限し、由熙に「**우리**」への同一化を要請する「オンニ」の姿にナシヨナリズム的傾向を見ることは容易い。しかし、韓国語であるはずの「オンニ」＝「私」の語りが日本語に翻訳されているという「由熙」の構造は、そのような批判を周到に回避し、回収するように成立しているとさえいえる。この「由熙」の翻訳の問題は、掲載誌や掲載書籍が主なターゲット層とする読者に、純然たる韓国語による語りではその内容の理解が見込めないという現実上の制約を述べているのでは

ない。むしろ、この構造が韓国語を日本語に従属させていると言いたいのでもない。서울말(ソウルマ)へと局限されていた筈の「オンニ」にとつての「우리말(ウリマ) (母語)」＝韓国語が日本語にまで開かれていくという事実は、「由熙」において、「オンニ」が「우리(ウリ)」という「Cage・檻」であり「Fence・囲い」を開いていく可能性を充分に有していることを示しているのである。

——オンニとアジユモニの韓国語が好きです。……こんな風な韓国語を話す人たちがいたと知っただけでも、この国に居続けてきた甲斐がありました。私は、この家にいたんです。この国ではなく、この家に。

——アジユモニとオンニの声が好きなんです。お二人の韓国語が好きなんです。……お二人が喋る韓国語なら、みなすつとからだに入ってくるんです。

由熙が好きだという、「この家」の中で用いられる「オンニ」と「アジユモニ」の韓国語とは、標準化・規範化されることのない、서울말(ソウルマ)を脱中心化するような韓国語の姿であろう。そして、「아(ア)の余韻だけが喉に絡みつき、아(ア)に続く音が出てこなかっ

た。」という語りで示唆される末尾の「オンニ」の「ことばの杖」の喪失もまた、「オンニ」の「掴めない」「杖」の可能性を開示するものだと解釈できる。

一つ概念に回収されることのない、開かれた言葉。思えば「由熙」というこの物語のタイトルは、「ユヒ」というルビが同伴するものであった。日本語の文化圏にいる限り、「유히(ユヒ) | 말미암을(マミアムル) 由(原因理由の由) に빛날(ビトナル) 熙(輝く熙)」という音を持つ漢字を彼女のエスニシティに沿った形で読むためには、読み仮名が要請される。「由熙」というタイトルがこうした多重性を内包する限り、この物語を「二つの」という言葉を冠する二項対立で読み解くことは片手落ちである。韓国と日本、韓国語と日本語、母国語と母語という対立によって見えなくなるものの存在に鋭敏になり、「在日同胞」の女性を描いたこの「由熙」という物語を、日本と韓国の間で揺れる物語として安易に回収しないこと。それは、見える化・見えない化されるさまざまな差別や抑圧を、韓国と日本という限定的な二つの国の問題としてのみ受け取らないことである。「日帝強占」＝日本による植民地主義政策という近現代史に起因し、政治的かつ人為的であるが故に様々な人びとの痛みを伴うこの線引きを、「우리(ウリ) | 日本(日本) | われわれ」として、「우리(ウリ) | 韓人(韓人) | としてではなく、全ての

人に開かれた(ウッリ)の普遍的な問題として受け取ることは、決して不可能なことではないだろう。

国籍、民族、文化、言語の問題を越えて(ウッリ)を開くという行為は、あるいは親密でありながらも限定的で排他的な、ともすると「ウッリ」(cage・檻)となりかねない「ウッリ」(われわれ)としての「ウッリ」(fence・囲い)を取り去るということである。むしろ、ここには限定的な範囲で連帯せざるを得なかった人びとの連帯をむやみに否定する意図はない。それは、理想論に過ぎないという批判を甘受してでも、「ウッリ」という言葉で、当事者へのみ責任を押しつける無関心を断固拒否する姿勢である。

「掴めない」「ことばの杖」の可能性を信じ、開かれた(ウッリ)の可能性を模索し続けること。「由熙」という物語を他者の物語として消費してはならないと、深い自戒を込めつつ主張しなければならぬ。

〔注〕

(1) 本稿では、朝鮮半島にルーツを持ち、植民地政策によって日本に定住することとなった人びとやその系譜を受け継ぐ人びとを、国籍や政治

的立場を問わずに「在日コリアン」と呼称する。なお、「재일동포」(在日同胞)とは、国や民族の同一性を強調する言葉であり、居住地を基準とし、日常生活でより頻繁に使われる「재일교포」(在日僑胞)とは厳密には異なる概念である。

(2) 「年譜」『李良枝全集』講談社、平成5年5月

(3) 李良枝「私にとっての母国と日本」『李良枝全集』講談社、平成5年5月より引用。なお、全集取載のこの文章は、平成2(1990)年10月한일문화교류기금(韓日文化交流基金)主催の「한일문화강좌」(韓日文化講座) 15における講演「나에게 있어서의 母國과 日本」の講演録を安宇植が翻訳したものである。自筆年譜によると、この講演の原稿は「学校のレポート以外では初めて自分で直接韓国語で書いたもの」である。

(4) 小林富久子「狭間」から書く在日女性作家たち―李良枝「由熙」を中心に(水田宗子・長谷川啓・北田幸恵編『韓流サブカルチャーと女性』(至文堂、平成18年9月))

(5) 山崎和「他者の「ことば」の意味を問う―李良枝「由熙」論」(『跨境：日本語文学研究』令和5年11月)

(6) 寺下浩徳「つくられたいくつもの名前―李良枝「由熙」をあとがきから読み直す」(『立命館言語文化研究』平成20年2月)

(7) 上田敦子論「文字」という「ことば」―李良枝「由熙」をめぐって」(『日本近代文学』平成12年5月)

(8) 注3に同じ。

(9) このような点については、岩崎稔・大川正彦・中野敏夫・李孝徳編『継続する植民地主義 ジェンダー／民族／人種／階級』(厚徳社、平成17年2月) 及び李里花編『朝鮮籍とは何か―トランスナショナルの視点から』(明石書店、令和3年2月) 参照。

(10) 「私」＝「オンニ」による一人称の語りが由熙の内面に到達できない

という意味において、由熙の母国に韓国以外の国を想定することもまた可能だといえる。

- (11) これは、「物語上からは読み取れない」由熙の実際の国籍の如何とは無関係である。むしろ、これは由熙が他の属性を選ぶべきであったということを決して意味しない。また、「在日同胞」であり「韓国人」であるという属性を選択しない・選択せざるを得なかった現実の人びとを否定したり、蔑ろにしたりするものでもない。

- (12) 注7に同じ。由熙が「漢字仮名交じり文を読むまなざしでハンゲルを見ている」という指摘は、韓国語が膠着語であり日本語と文法構造が非常によく似ていること、両国が数多の漢字語彙を共有し、とくにその共有が（由熙が大学生活で接するような）学術用語において顕著であること、また由熙と同様に日本語を第一言語とし、第二言語として韓国語を習得した自身の実際の経路上からも大いに賛同する。

- (13) 中山亜紀子「由熙」を読む―第二言語教育との関わりから―（佐賀大学留学生センター紀要）平成23年3月
<https://www.zohok.ac.jp/>、(令和6年3月25日最終閲覧) 参照。

- (14) 「사이버국가고시센터」(サイバー国家考試センター) <https://www.go.go.kr/>、(令和6年3月25日最終閲覧) 参照。

- (15) 「고려대 한국어대사전」(高麗大韓國語大事典) (고려대학교민족문화연구원 (高麗大學校民族文化研究院)、平成21(2009)年10月)「거짓말장어」参照。

- (16) 문교부 고시 제 88 1 2 호 (文教部告示第88-2号) 「표준어 규정」(標準語規定) (昭和63(1988)年1月19日)

- (17) 이근열 (李根烈) 「사투리의 미학」(6) 경상도 사람 신별법」(方言の美学) (6) 慶尚道人の識別法」(국제신문「國際新聞」平成16(2004)年10月19日。記事では、「가지」から「까치」へ、「갈치」から「갈치」への硬音化が具体例として紹介されている。

- (18) 注(16)に同じ。

- (19) 在日コリアン一世の本籍地は、慶尚道、全羅道、忠清道、濟州島の順で多く、朝鮮半島南部出身が大半を占めていた。

- (20) 申銀珠「ソウルの異邦人、その周辺」李良枝「由熙」をめぐって―「新潟国際情報大学情報文化学部紀要」平成16年3月)や趙允珠「李良枝「由熙」論「政治的」と「文化的」との狭間から視点変化まで」(「日本語文学」平成27年8月)など。

- (21) 佐藤秀明論「ソウルの在日韓国人―李良枝と「由熙」(ユヒ)」の場合」(「書簡研究」平成6年7月)

- (22) 李良枝「言葉の杖を求めて」(『李良枝全集』講談社、平成5年5月)より引用。なお、この文章の初出は韓国語版「由熙」삼신각(三神閣)、平成元(1989)年2月)である。初出は李良枝の日本語原稿を김유동(金ユドン)が韓国語訳する形で収載された。なお、全集収載版は、この韓国語訳を安宇植が再度日本語に翻訳したものである。

- (23) 「고려대 한국어대사전」(高麗大韓國語大事典) (고려대학교민족문화연구원 (高麗大學校民族文化研究院)、平成21(2009)年10月)「우리」の項には、「올타리. 의 방언(정북)」(「올타리」の方言(慶北))との意味が掲載されている。なお同辞書によると「올타리」とは①「堀の代わりに草や木などを絡ませて家などを囲んだり、境界を分けるもの」あるいは②「一定の範囲や限界を比喩的に表す言葉」を指す。「草や木」との記述はあるが、実際は材質を限らず、金属製のものも含めて「올타리」と呼ぶ。英訳や日本語訳される際、この語が「fence」「フェンス」と翻訳されることが一般的であること、また、②の比喩的な意味をも訳出するために、本稿では「올타리 (fence・囲い)」の訳語を採用した。

- (24) 注(20) 申銀珠論に同じ。

*本文の引用は『李良枝全集』(講談社、平成5年5月)に拠る。なお、

傍点は稿者が施した。
* 本稿では大韓民国は「韓国」、朝鮮民主主義人民共和国は「北朝鮮」という略称・通称を使用した。また、本稿では便宜上の理由から元号表記を主に採用しているが、そこに政治的意図は存在しないことを付け加えておく。